様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１５７

研究課題名（和文）絵物語の理論的源泉としての観相学

研究課題名（英文）Physiognomy as theoretical background of proto-comics

研究代表者
森田　直子（MORITA, NAOKO）

東北大学・情報科学研究科・准教授

研究者番号：４０２９５１１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、観相学という知の体系が19世紀の絵物語形式のメディアの成立に与えた影響を解明した。まず、19世紀前半のスイスで、後のストーリー漫画の原型となるような近代的絵物語を刊行したR.テプフェールが観相学を作画に取り入れた背景を解明した。一作品あたり何百回も同じ顔を描くことで物語るメディアの語りのしくみと、17・18世紀ヨーロッパの美術・演劇論・修辞学との関連を探った。とくに、18世紀までの美術・演劇理論や作法書等において、「内面を映し出す顔」と「作法・演技としての顔」という顔表現の二面性への関心が強く見られたことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Our research aims to examine the influence of the old science called “physiognomy” on the foundation of a new narrative medium of the 19th century in Europe, later called “comic strips”. First, we investigated how a Genevan writer Rodolphe Topffer (1799-1846), today considered as the father of the comic strip, made use of the concept of physiognomy to theorize his method of character drawing. The possibility of telling a story by drawing the same face hundreds of times was his great finding, but was also, we showed, a result of prevailing physiognomic interests in theoretical writings on painting, acting and rhetoric in the 17th and 18th centuries. We emphasized that the contradictory aspects of a facial expression, namely, the fact that a face can reveal or conceal the person’s inner life, were often explored in arts or in books of manners in the same period.

研究分野：人文学

キーワード：観相学　絵物語　テプフェール　語り

１．研究開始当初の背景

ロドルフ・テプフェール（Rodolphe Töpffer, 1799-1846）は、19 世紀ジュネーヴを代表する作家で、教育者・政治家としても活躍した人物である。その表現活動は、小説や美術批評から挿絵入り旅行記、さらに「版画物語」という呼称で知られる絵物語まで、多岐に渡っている。「版画物語」は、横長の判型を用い、線描画の下にキャプションを添えたコマが 1 ページあたり平均 2~3 コマ並ぶ、1 冊 50~100 ページほどの絵物語である。文と絵の両方をテプフェール自身がペンで仕上げたあと石版で印刷・製本しているため「版画物語」と呼ばれた。これは、世界のコミックス（ストーリー漫画）史研究において、コミックスの原型とみなされている物語形式である。

一方、本研究のキーワードである観相学（英 physiognomy、仏 physiognomonie）は、人相からその人の性格や人柄、運命などを推し量ろうとする知の体系である。西欧の観相学は、時代ごとの世界観や宗教観、身体観、そして科学思想と結びつきながら、東洋の人相術とは異なった展開をたどり、19 世紀まで大きなインパクトを与え続けた。

テプフェールは、虚構人物の顔の描き方をひとつのシステムとして捉えた。その際、当時流行していたラヴァーター流の（現実社会に適用可能な）観相学に反して、美学者・実作者としての立場から作画法を編み出し、「観相学」というタームに新たな意味を込めて『観相学試論』（1845）にまとめた。その主要な論点である、物語制作における描線の重要性については、過去の研究（基盤研究 C23520362）で明らかにしたが、テプフェールがラヴァーター以外のいかなる観相学的伝統をふまえているか、という点が今後の課題として残った。

また、テプフェールの作品研究を通して、彼の絵物語の中核をなす「笑い」が演劇的な「状況のおもしろさ」だけでなく、「（描かれた）顔のおもしろさ」にも大きく依存していることが明らかになったが、その発想源には文学・絵画・カリカチュア・演劇等、異なる領域を横断する観相学的な関心があることがわかり、本研究の着想へとつながった。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 2 点にまとめられる。

⑴　19 世紀前半のスイスで、後のコミックストリップ（ストーリー漫画）の原型となるような、独自の絵物語を刊行した R. テプフェールの実践が、観相学に関する知の体系をどのように取り入れたのかを解明する。一作品あたり何百もの顔を描く必要のある絵物語というメディアにおいて、「顔で語る」しくみとはどのようなものか、17･18 世紀ヨーロッパの美術や演劇の理論および修辞学からの影響のもとに示す。

⑵　「内面を映し出す顔」と「作法・演技としての顔」という、相反する顔表現（表情）への関心が、絵物語という新しいメディアの語りのしくみを生み出すまでの、18 世紀の美術・演劇・舞踊等の理論的展開を考察する。

３．研究の方法

⑴　18 世紀までの観相学の分野横断的な波及がテプフェールの絵物語に与えた影響について、絵画教育の必須項目とされたシャルル・ル・ブラン『感情（情念）表現に関する講演』（1668）や、W.ホガース、T.ローランドソン、L.-L.ボワイー、C.ヴェルネ等のカリカチュアからの影響を、テプフェールの理論的著作や素描、書簡などを対象として調査した。

⑵　テプフェールの身体表現の源泉として、彼自身の演劇体験（戯曲執筆・上演）

や、18 世紀の俳優演技論（エンゲルスら）とのつながりについて、『観相学試論』を中心に検証した。17 世紀以降の作法書の流行との関連も、N.エリアス、J-J.クルティーヌらの先行研究を参照しつつ考察した。

⑶　実証的・科学的な近代美学の先駆けとして 19 世紀初頭まで多大な影響を与え、テプフェールの蔵書にもある J.-B.デュボス『詩と絵画における批判的考察』（1719）や、文学ジャンルにおける登場人物描写の系譜と観相学の関係について、絵物語における人物描写方法が編み出される背景として調査した。

４．研究成果

⑴　観相学と「文明の作法」（N.エリアス）双方への関心が融合した人物表象の実例として、テプフェールによる創作絵物語『クレパンさん』（*Mr. Crépin*, Genève, 1837）の翻訳・解題をおさめた復刻版を作成、関係者に頒布した。

しばしば「映画以前の映画的技法」と表現される彼のスピーディな運動表現は、同時代においてはむしろ西洋絵画の伝統をうけつぐ「情念」の表現であった、との視点を提示した（阿部宏慈・中村唯史編、2015 年における分担執筆）。

その他、演説上の技術としての表情、俳優の演技における表情、絵画における人物の表情の重要性を考えさせる気運や、普遍言語としてのパントマイムへの関心が同時進行していた状況について、テプフェールの絵物語の表現と関連づけて示す予定（刊行準備中）。

⑵　「顔の絵によって物語る」ということがどう実現されるのか、という問題に対し、（現代において主流である発話記号であるフキダシを用いない）絵と文を並置した形式にも注目して考察した。このような形式の語りにおいて、内面を映し出すとともに隠蔽もする顔の絵が果たす役割をめぐって、口頭発表（2015,2017）をおこない、より広く物語論の枠組みから考察した（鈴木雅雄・中田健太郎編、2017 年における分担執筆）。

⑶　ストーリー漫画史のなかにテプフェールを位置づけるための方法論の再検討をおこなった。日本でテプフェールの絵物語を評価する場合、17・18 世紀の芸術思潮からの影響を重視するよりも、漫画が重要なメディアとなっている現代の状況に照らして彼の革新的なこころみを位置づけることが求められる傾向がある。ティエリ・グルンステンとの対話を経て、Cité internationale de la bande dessinée et de l'image のオンライン専門誌である *neuvième art 2.0* に寄稿、日本におけるテプフェール研究の意義を論じた。また日本の漫画を基準とせず、世界のストーリー漫画に対して視野を広げることの重要性についても主張した。

研究期間の１，２年目においては観相学の適用領域として美術・演劇・舞踊を重視していたが、物語る行為における「内面を映し、隠蔽する顔」図像の活用は、小説における語りの技法の歴史とも深い関連があることに気づき、最終年度にかけては若干の軌道修正をおこなった。このことは、ストーリー漫画の歴史的展開を今後も継続して考察していくための大きな足がかりとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

①Naoko MORITA, « La découverte de Töpffer au Japon », *neuvième art 2.0, la revue en ligne de la Cité internationale de la bande dessiné et de l'image*, mai

2015. 査読無
(http://neuviemeart.citebd.org/spip.php?rubrique122)

②森田直子「屋根の上へ！―ロドルフ・テプフェールにおける垂直方向の詩学―」『Caricaturana　2014』学習院大学大学院人文科学研究所共同研究プロジェクト「フランス文学における諷刺の諸相」成果報告書、査読無、2015 年 3 月、45－53.

〔学会発表〕（計　5　件）
①森田直子「テキストとイメージを媒介する身体言語について」、ワークショップ「テキストとイメージの近代：エンブレム文化の変容と寓意表象の多様性をめぐって」日本比較文学会東北支部 2016 年度東北大会、2016 年 11 月 26 日、福島大学。

②森田直子「読書の現在性と記憶をいかに再現するか　―高野文子『黄色い本』を読む」第 20 回ナラティヴ・メディア研究会、2016 年 9 月 2 日、東北大学大学院情報科学研究科 3 階小講義室。

③森田直子「ロドルフ・テプフェールにおける描線」、アンヌ＝マリー・クリスタンに捧げる国際シンポジウム「テクストとイメージ」2016 年 5 月 21 日、東京大学本郷キャンパス法文 2 号館 2F1 大教室。

④森田直子「フキダシのないストーリーマンガ：19 世紀ヨーロッパを中心に」ワークショップ「マンガ、あるいは「見る」ことの近代」第６回、早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」主催、2015 年 7 月 25 日、早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 5 階 581 教室。
http://flas.waseda.jp/rilas/research_report/european_studies1/

⑤森田直子「動物寓話の伝統とその変容」ワークショップ「物語という名の動物園―動物を通して語られる人間、自然、核時代」コーディネーターおよび報告、日本比較文学会第 77 回全国大会、2015 年 6 月 13 日、立命館大学衣笠キャンパス。

〔図書〕（計　3　件）
①鈴木雅雄・中田健太郎編『マンガ視覚文化論』水声社、2017 年。（分担部分　森田直子「初期ストーリー漫画におけるキャプションとフキダシ　―漫画の語りに必要な言葉とは何か」、231-259 ページ。）

②ロドルフ・テプフェール『クレパンさん』、まえがき・日本語訳　森田直子、ナラティヴ・メディア研究会、2017 年、90 ページ。

③阿部宏慈・中村唯史編『現代視覚表象におけるメディア的身体の研究』山形大学人文学部叢書 7、山形大学人文学部、2015 年。（分担部分　森田直子「テプフェール漫画における追跡」43－70 ページ。）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

「ナラティヴ・メディア研究会のご案内」

http://www.media.is.tohoku.ac.jp/~morita/naoko/nm.html

６．研究組織

(1)研究代表者

森田　直子　（MORITA NAOKO）

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号：４０２９５１１８

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

森本　浩一（MORIMOTO KOICHI）

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：２０１８２２６４

(4)研究協力者

（　　）